

スマートフォン利用者の関与別の特徴

ー モバイル利用のライフスタイル研究 ー

○小島誠也（NTT ドコモ モバイル社会研究所）、飽戸弘（東京大学名誉教授）

キーワード：スマートフォン、ライフスタイル、関与

1. 背景

スマートフォン（以下、スマホ）ではさまざまなアプリケーションを利用できるため、人によってスマホの使い方やスマホとの関わり方が大きく異なる。関わり方の概念の1つである製品関与について、現在に至るまで様々な研究がされている[1][2]。本研究ではスマホとの関与について分析し、関与特性によって分類したグループに関して、それぞれの特徴を明らかにする。

2. 分析

スマホとの関与に関する 10 設問から因子分析を実施する。析出した因子をもとにクラスタ分析 (k-means 法) を実施し、分類されたクラスタについて、それぞれの特徴を比較・分析する。

3. 結果

因子分析の結果、「夢中」「必需」「利活用」の3因子を析出した(表1)。因子からクラスタ分析を実施した結果、「高関与」「夢中」「利活用」「低関与」「超低関与」の5クラスタに分類された(表2)。各クラスタの特徴を比較したところ、性年代別では、男女ともに15～39歳は「高関与」の割合が高く、25～39歳は「高関与」「夢中」の割合が高かった。40～59歳については、男性は「利活用」「低関与」、女性は「夢中」の割合が高かった。60～79歳は男女とも「利活用」「低関与」「超低関与」の割合が高かった。また、スマホで最も行っていることについては、「高関与」「夢中」は趣味・娯楽の割合が高く、コミュニケーションが低いのにに対し、「利活用」「低関与」「超低関与」はコミュニケーションが高く、趣味・娯楽が低かった。加えて、「夢中」および「超低関与」は、スマホで最も行うことが暇つぶしだとする割合が高い一方、「利活用」は暇つぶしの割合が低いという特徴がみられた。

4. 考察

スマホと高関与のグループは、趣味・娯楽等にスマホを活用することでスマホを使う時間も長くなり、結果として高い関与を示したと考えられる。一方で、関与が低いグループは、スマホを主にコミュニケーションに利用する割合が高く、ほかの目的に利用することが少ないた

め、関与が低くなっていると考えられる。

表1 因子分析結果

設問	因子		
	1. 夢中	2. 必需	3. 利活用
気がつく、思っていたより長い時間スマートフォンをしていることがある	0.93	0.00	-0.05
特に目的もなくスマートフォンを触っていることがある	0.91	-0.05	-0.05
スマートフォンを使っていると、つい夢中になってしまう	0.62	0.03	0.20
スマートフォンに連絡・通知が来ているのに、つい確認してしまう	0.59	0.09	-0.02
スマートフォンが破損、紛失などで使えなくなると困る	0.00	0.87	-0.10
スマートフォンを使うと、日常生活を快適に過ごせる	-0.02	0.82	0.04
スマートフォンは自分にとってなくてはならない	0.08	0.81	-0.02
スマートフォンをうまく使いこなしている	-0.03	-0.07	0.89
スマートフォンの機能やサービスを知っている	0.05	-0.09	0.87
スマートフォンを利用することは、自分のためになる	-0.07	0.34	0.50

表2 クラスタ分析結果

	クラスタ				
	高関与	夢中	利活用	低関与	超低関与
因子1 夢中	1.16	0.51	-0.68	-0.64	-1.47
因子2 必需	1.16	0.18	0.13	-0.62	-1.90
因子3 利活用	1.04	-0.04	0.64	-0.68	-1.60
サンプル数	1046 (19%)	1833 (32%)	946 (17%)	1420 (25%)	407 (7%)

調査概要

調査時期：2023年2月 調査方法：Web 調査

調査対象：全国の15～79歳の男女

標本抽出法：QUOTA SAMPLING。性別・年齢（5歳刻み）・都道府県のセグメントで日本の人口分布に比例して割付しスマホ所有率を調査。調査結果からスマホ所有者比率に比例して再割付を実施。

有効回答数：5,652

引用文献

[1] 中川秀和(1994)「購買行動と関与」 飽戸弘編著『消費行動の社会心理学』植村出版 120-151

[2] 飽戸弘・他(2013)「スマートフォン利用へのライフスタイルアプローチ(2) 一製品関与の構造と類型一」『日本行動計量学会 第41回大会抄録集』,8-9